

# 南仏ミディ運河の カナルボートの旅

文・写真=ハリ岡野  
report & photos by Harry Okano



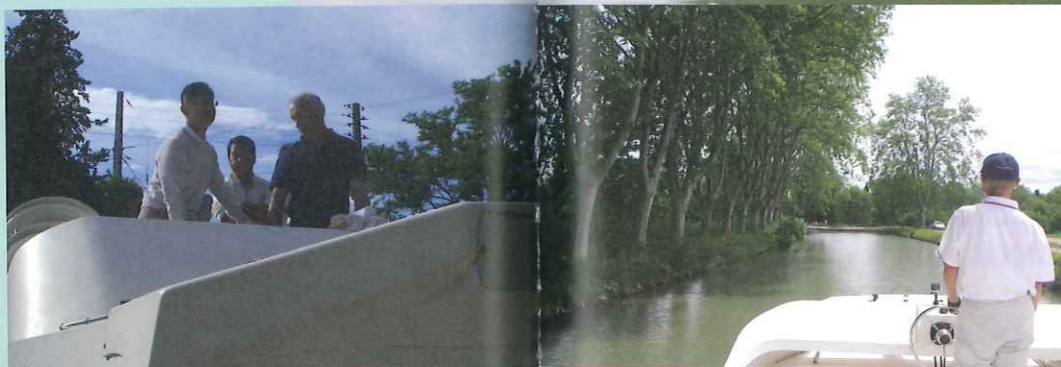
筆者(ハリ岡野)と妻のおかのゆうこ。普段はシーボニアマリーナをベースに、愛艇(りあんど3号)でセーリングを楽しんでいる。人生の節目の旅に、南仏の運河クルーズを選んだ



## フランスの運河クルーズをヨット乗りがやってみた!

週末の休日は、相模湾でヨットライフを楽しむハリ岡野さん／おかのゆうこさん夫妻。晴人さんの会社の定年を機に、海外でのクルーズに出かけようと考えた。南太平洋、カリブ海、地中海……憧れのセーリングゲレンデは、数えきれない。しかし、そんな二人が選んだのは、意外にも南フランスの運河クルーズだった。ヨーロッパでは定番ながら、日本ではまだまだ知られていないカナルボートの楽しみを、ヨット乗りならではの目線で大いに語っていただく。

(編集部)



上：ボートなど操船したことのない人でも、キャプテンなしで楽しめる——それが、カナルボートで楽しむ運河クルーズの世界だ。まさに「案ずるより産むがやすし」で、誰でも素晴らしい経験ができるだろう  
左：カナルボートの最高時速は8km程度。文字通り、のんびりと進んでいく。舵利きは、ヨットや一般的なパワーボートとは、ずいぶん異なる印象だ。運河内では、基本的に、明るい時間の航行になる

今回のミディ運河クルーズでは、日程を合わせられた3グループが、3艇のカナルボートをレンタル。私たち夫婦は、2人で37ftのボートを手配でき、ほかの2グループは6人ずつなので42ftのボートだ。

### ミディ運河の魅力

運河クルーズは、現地集合、現地解散が基本。5月24日(土)の夕方、出発地カルカソンヌの船着き場に、3グループ14人の日本人が無事に集まった。

今回の航程は、全長240kmのミディ運河のほぼ中間点にあるカルカソンヌで艇を借りて、地中海に向かって下っていき、終着点近くのアグドで返却するというもの。距離にして127km、道中には40個のロック(閘門)がある。6日間の航程の最終日は、地中海に接するトー湖まで日帰り

行って帰ってくる予定なので、延べ約140kmをクルーズすることになる。

そして、走り始めて気づいた。運河クルーズは、南仏の景色を楽しみながら、のんびり航行していくものだと思っていたのだが、ロックが数キロおきに出てくるのではないかな。

ロックに入ると、筋いロープをビット(係留杭)に回し、艇が動かないようにロープを手で押さえる。後ろの水門が閉じた後は、水面が下がるのに合わせて、ロープを調節していく。前の水門が開くとロープを回収し、ようやくロックの外へ——こんな作業を、ロックを通過するたびに繰り返すわけだ。まるで、離着岸の練習を繰り返しているようなもの。運河クルーズは、意外と忙しい……。

そうはいつても、そこはやっぱり運河クルーズ。プラタナス並木の間を爽やかな

### 人生の節目の記念に

私は、物心がついたころから、父に連れられてヨットに乗ってきた。今年60歳になり、会社人生の節目を迎えるにあたって、一度は海外でのクルージングをしようと考えた次第。国内外のクルーズ会社にあれこれ問い合わせたが、どこにしようか考えあぐねていた。南太平洋、エーゲ海、アドリア海、地中海……行きたい海域ばかりだが、なかなか希望にかなう艇を手配できない状況が続く。

そんなとき、リビエラリゾートの会報誌で目にしたのが、フランスの運河クルージングの記事。フランスには行ったこともなく、語学も不安だったが、「ミディ運河クルーズをやってみよう!」と、意外にも簡単に決心した。



左：われわれが今回チャーターした37ftのカナルボート。イギリスのナローボートとは、形が異なっている。日本のクルーズ会社を通して、Le Canalousという会社で利用した。チャーター料金は、1週間で約30万円。1人でも6人でも同じ料金だ

上：ボートを借りる際には、実に簡単なレクチャーを受ける。スロットルとスラスターの操作方法とロープワーク程度。驚いてしまったが、安全なものだからこそ、多くの人が楽しめるのだろう

下：フライブリッジの上で、朝食を楽しむひととき。ゆったりとした風景のなかで過ごす時間は、格別なものだ



風が抜け、鳥の声も聞こえてくる。岸边には小さな花が咲き、土手の向こうには、整然と並べて植えられたブドウ畑やオリーブ畑が見えてくる。水面にはカモの親子が泳いでいて、ビーバーの姿も目にした。牧場では馬や牛、ロバが草を食み、豚舎のそばを通るときには、万国共通の良い香り(?)も漂ってくる。

最高時速8kmのゆっくりとした航行だが、それでも周りの景色はどんどん変化していく。場所ごとに雰囲気異なり、森の中に入ったり、草原の真ん中にいたり、切り立った崖の間を行くときもある。そんな自然を満喫しながらの旅だ。

ときどき、運河を遡ってくる艇と行き交うこともある。側道をサイクリングしている人たちもいる。ロックでは、陸路で旅している人たちが、ロック通過を見物している。そんなときには、手を振り合ってごあいさつ。そして、ロックの通過待ち中は、近くの艇の方々とおしゃべりタイムだ。「どこから来たの?」、「今日はどこまで行くの?」、「どんな航海だった?」。ハーバー



ロック(閘門)とは、水位の異なる水面を行き来するために考えられた装置。写真奥の水面は、ロック内の水面に比べて、かなり高い位置にあることが分かると思う

でもよく聞かれる、たわいない会話かもしれないが、お互い同じ目的でクルーズしている仲間なのだ。

カナルボートには、乗っている人の国旗が掲揚されている。フランスはもとより、ドイツ、イギリス、さらには、ウクライナやギリシャの国旗も目にした。私たちは、日の丸に加



ロック内に水を出し入れする際には、船が動かないように、陸側にロープでつないでおく必要がある。2人だったので、この作業の連続に、少々疲れてしまった



われわれ以外に日本から来た2グループは、ボート未経験者や女性も多かった。それでも、みんな楽しんでいる様子が印象的だった。これは係留作業を行っているところ



基本的には、禁止区域以外は、運河内のどこに係留してもよい。陸にクリートやボラードがないところでは、こんな具合に、ハンマーで杭を打って、そこに舳を取る

えて、所属するシーボニアヨットクラブのクラブ旗も掲揚。でも、東洋系の人には、クルーズ中にはとうとう出会わなかった。

運河を航行しているのはチャーターボートだけではなく、マストを倒したクルーザーヨット(おそらくセンターボード艇)、イギリスのナローボート、はたまた運河で生活していると思われる個人所有のカナルボートもいる。観光客を乗せた旅客船やボツーンボートのような艇、日帰りクルーズ用の小さなパワーボートなど、多彩な顔ぶれだ。

### 男を上げる? 運河クルーズ

運河クルーズを初体験して一番驚いたのは、船を操船したことのない人でもボートを借りられるということ。レクチャーがあるとは聞いていたが、前後進のスロットル操作、バウスラスターの使い方、クリートへの結び方程度でおしまいなのだ。

今回同行したグループの一つは家族で参加されたのだが、どなたもクルージングは未経験で、操船経験もないとのことだった。私は、曲がりなりにもいろいろなヨットやパワーボートを操船した経験があるが、免許も経験もなく出航できるこの運河クルーズが、この先一体どうなるのか、はなはだ不安を感じた。

クルーズが始まると、ご子息が主に操縦を担当していたが、最初はなかなか思うように艇を動かさない様子。船の上の皆さんが、それぞれ何をどうすればいいのかわからず、役割もはっきりせず、見ているとどかしいものがあった。でも、これは基本の“き”も知らずにいるのだから、致



両岸をプラタナス並木に囲まれた中を、仲間のカナルボートのんびりと進んでいく。憧れていた美しい南仏の風景は、われわれ二人を大満足させてくれた

し方ないことだろう。

しかし、最高時速が8kmしか出ないボートだし、波もない水面だから、操船はそれほど難しいものではない。ボートの周りには、たくさんのフェンダーが下がっており、多少何かに当たっても、それほど気にしなくても大丈夫。ボートが風に流されて、運河をふさぐように真横になっている場面もあったが、それもやがて克服し、航程の後半になるころには、危なげなく操船する姿に、本当に驚いた。

運河クルーズに対して、敷居の高さを感じている人はいると思う。しかし、この運河クルーズが、いかに万人に開かれているかということを実感した次第だ。

ちなみに、このグループは、ご子息の新婚旅行を兼ねての参加。新郎の操船技術がめきめき上達する姿を見て、新婦はあらためて惚れ直したようだ。彼女がその思いをみんなに披露した場面は、参加者の心を和ませ、ほほえましい温かいシーンとなった。男を上げるチャンスが、こんなところにもあるとは……。世の男性諸氏には、船は男を上げるのに最適なツールだということ、ぜひ知っていただきたい。

### クルーズのハイライト

ここで、簡単にミディ運河について紹介したい。ミディ運河は、南フランスのミネルヴォワワインをパリに運ぶために、大西洋に注ぐガロンヌ川と地中海とを結ぶもの。17世紀に、ルイ14世の命を受けたピエールポール・リケが、14年をかけて築いたものだ。それ以前は、地中海からジブラルタ



上:17世紀に造られたミディ運河は、そもそもワインを運ぶことを目的にしていた。航行中には、ブドウ畑が一面に広がる様子も、頻りに見かけた  
下:途中では大きな町もいくつかあったが、航程の大半は自然のなかを進んでいくもの。親子で泳ぐカモや、写真のビーバーなど、野生動物にも数多く出会った

### カナルボートの役立ち情報

カナルボートを借りるには、場所と日程と人数をクルーズ会社に伝えて、希望にかなう艇を確保するという流れ。フライブリッジがあるほうが、運河の両岸の土手の向こうの景色も見えるので、より楽しめると思う。チャーター費用は、艇種、期間、季節で変わる。今回、われわれは2人で乗船したが、ロック通過を考えると、最低3人は乗っていたほうが楽だろう。何人に乗るかによって艇の大きさは決まるが、船内装備の充実度に差がある。同じ6人分のバースがあっても、トイレ、シャワーが個室ごとに付いている艇もあるので、メンバー構成によって選択したらいだろう。艇の設備は、セーリングクルーザーとほぼ

同じ。ギャレー、バース、ヘッド、シャワーなどがそろっている。食器、台所用品、安全備品もそろっているが、面白いのは、鉄製のベグが搭載されていること。運河での係留には必須のアイテムだ。電源は、12Vのシガーライターソケットと、陸電を取ったときの220Vのソケットが付いている。

●ハリ岡野のホームページ  
<http://homepage1.nifty.com/okharry/>  
●運河クルーズの問い合わせ  
(有)アドバンティス(担当/矢部)  
TEL: 03-5314-5424  
E-mail: info@canal.advantis-jp.net  
<http://canal.advantis-jp.net/>



ル海峽を通って大西洋に出ているので、3,000kmの距離が短縮され、海峡通過時にスペインに支払っていた高い通行税が不要になった。1996年には、世界遺産に登録されている。

5月25日(日)朝、カルカソンヌを出発し、マルセイユ、オンブス、キャプスタン、ベジエのロック前で係留泊をして、29日(木)に目的地のアグドに到着。30日(金)

は、アグドからトー湖まで日帰りクルーズを楽しんで、アグドに戻った。

途中、川の上を走る運河橋のオルビエル橋やレピュードル橋、マルバストーン、ワインカーブ(ワイン蔵)「ヴァンティニヤック・ミネルヴォワ」、アンセリユヌ遺跡、ミディ運河最大の難所であるフォンセラヌの7段ロック、最後にトー湖と、見どころ満載のコースだった。

特に、ベジエの手前にある7段ロックは、フランスの運河の中でも有名なロックで、22mの高低差を一気に克服する。その景色はなかなかのもので、ベジエの観光名所になっているほどだ。7段のロックをまとめて進むので、上りと下りの通行時間帯が決められている。

この7段ロックを、3艇そろって無事通過。ここでは、家内が舳いロープを持ったまま、側道を下りながら進んでいったため、離着岸の動作が不要になり、意外とスムーズに通過できた。来るまでは、ミディ運河クルーズ最大の難所だと思っていたが、むしろ坦々と通過して、物足りない感じさえあった。

もう一つのハイライトは、ミディ運河で唯一のトンネルであるマルバトンネル。ミディ運河は、起伏の多い複雑な地形を縫うように建設されているが、ここだけはトンネルを掘ってショートカットしたとのこと。全長は160m、幅が狭いので片側通行だ。トンネルの手前が微妙にカーブしているため、かなり近づかないと反対側の状況



ミディ運河でたった一つ存在するトンネルであるマルバトンネル。ここまで近づいて、ようやく向こうの景色が見える。狭いので、中に入る前に、何度もホーンを鳴らしてから通過した



ミディ運河クルーズの最大のハイライトともいえる、フォンセラヌの7段ロックの壮観。この7段ロックを見物しようと、陸上からもたくさんの観光客がやって来る



チャーターベースに並ぶカナルボートを、対岸から望む。フランスのみならず、ヨーロッパ各国から、多くの利用者がミディ運河クルーズを楽しみにやって来る

が見通せず、ホーンを鳴らしながら接近していった。幸い、対向艇は来ず、無事通過。トンネルの内側は、壁が風化して不思議な凹凸模様になっていて、天井からコウモリが飛んできたりと、ちょっとした妖怪の世界だ。

トンネルの上には、紀元前800年からの要塞都市遺跡があり、1時間ほどの山登りをしてようやく到着。山の上から一望するパノラマ写真のような風景に、南仏の広大さを実感した。

最後に訪れたトー湖のマルセイヤンという町では、いよいよ地中海ということもあり、たくさんのヨットがセーリングしていた。トー湖で採れる水産物、特にカキやムール貝を堪能し、「次は地中海クルーズだ!」と、気持ちが高鳴った。



運河内には、本当にさまざまなボートが行き来して、船好きにはたまらない。年代物のボートや、どう見ても船上で生活しているようなカナルボートもあった

### カナルボートでの生活

私たちが行った5月末は、朝5時には目が昇り、夜8時すぎまで明るかった。朝食は、あらかじめ買っておいた食材を、フライブリッジで食べると気持ちいい。出航は、8時から9時くらいの間。途中の町を散策したり、名所を訪ねたり、ワインカーブに立ち寄りたりもする。昼食は、運河沿いのレストランで食べたり、朝のうちに作っておいたサンドイッチを食べたりという感じ。

次の停泊予定地に近づくと、係留場所探しが始まる。初日のマルセイエットは、われわれ以外は誰も係留していなかったが、3日目のキャプスタンでは、係留艇がいっぱいで、留める場所がなく、町外れの土手に係留することになった。

さて、係留が終わると、町の散策や買い物へ。ベジエやアグドなど大きな町に係留したときは、オープンカフェでビールなどを飲みながらのおしゃべりタイムも楽しい。夕食は、艇で食べたり、レストランに行ったりもする。



マルバトンネル近くの山の上から、モンタディ灌溉(かんがい)用池を望む。船を留めた後にも、いろいろと見どころがあるので、マンネリ化した海外旅行に飽きた諸兄も満足できるはず

運河の岸辺は、係留禁止の標識がない限り、基本的にどこでも係留OKだ。岸壁や簡単な木の棧橋があるところではピットに舳うが、土手沿いでは、地面に鉄製のペグをハンマーでたたき込み、それに舳う。運河は、流れもほとんどなく(秒速10~20cm)、他艇の曳き波も小さいので、安心して一晩を過ごすことができる。

一方、港の岸壁では、舳着けが原則だ。係留してある艇の間の狭い隙間に、後進でお尻を振りながら入っていく。結構気疲れするが、カナルボートの側面はたくさんのフェンダーで守られているから心配ない。でも、オンプスの港では10ktくらいの南の風が吹いていて、クルーズ2日目という日もあって艇に慣れておらず、さらに雨まで降っていた、今回のクルージングで一番つらい日となった。とてもこの風の中では、上手に舳着けする自信はなかったの、とりあえず広いスペースに右舷着けにして、あとは舳いロープを二人で引っ張って舳着けにした。きちんと直角に留めることができたときに、思わず家内と抱き合って喜んでいたら、隣に泊まっていた艇の中から拍手をいただいた。

このように、運河航行は作業が多く、また、散策で歩き回ったりするので、結構疲れる。そのせいか、夜は早めに床に就き、ぐっすり眠ってしまう。

ミディ運河の朝夕は、かなり冷え込む。暑がりの私でも、綿のセーターとダウンを着ていたほどだ。日が出てくると半袖になるが、気温はせいぜい20度前後だと思う。

なお、今回のクルーズで訪れた場所は、

どこも治安は悪くはなく、怖い思いはまったくしなかった。夜寝るときや、艇を離れるときには、一応カーテンを閉めて、ドアを施錠していた。

\*

水路図を見ながら自らの手で運河を航行し、好きなところで自由気ままに艇を係留して、町や遺跡を訪れ、地の物を食べる。現地の人やクルーズを楽しんでいる人と接し、風景ばかりでなく、風の流れ、匂い、音、肌感覚でその土地を感じられる——これが運河クルーズの魅力なのだ、強く感じた。

### 意外と忙しかったけれど、南仏での日々が大満足

のんびりクルージングを想像していた私。パソコンに何冊もの本のデータを入れ、のどかな風景の中で、フランス文学にこそしもうと楽しみにしていました。しかしながら、ロックゲートの通過という、ある意味楽しみにしていたイベントは、意外と間隔が狭く、私を忙しくさせました。私



たちは、2人で乗っていたので、ステアリングを握る夫の補佐役が、なかなか忙しいのです。最初は、自分の動きをなかなか把握できななりましたが、いくつかのロックを通るうちに、前と後ろの舳いロープを2本持って下船し、とりあえず艇の位置を保ち、夫が下りてくるのを待つ、という手順がやりやすいというコツを理解。着岸作業もなかなか大変でしたが、それもやがて楽しい作業へと変わっていきました。

ボートには、とても使いやすいキッチンが



ボートを係留した後で、あちこち散策するのも、楽しみの一つ。フランス人は気取っているなど聞くが、そんなことはなく、観光客相手のところであれば、英語では問題ない



食事のスタイルも人それぞれ。われわれは、夕食は寄港地近くのレストランで、本場のフランス料理や新鮮な水産物に舌鼓を打った。食材を買って調理し、船でのんびりするの悪くない



アグドでボートを返却した後、今回参加した女性メンバーで集まって記念写真を撮影。ヨットに乗らない読者の皆さんの家族や友人も、運河クルーズなら気軽に楽しめると思える

付いていて、ちょうど季節だった白アスパラガスを筆頭に、フランスの田舎町で買い込んだ食材で料理を楽しめました。特に、フライブリッジでいただく食事は格別でした。

憧れの運河クルーズを、本当に楽しいものにしたのは、なんとといっても、プラタナス

に囲まれた美しい風景と、フランスの田舎町ののどかな風景です。17世紀にできた運河の周りは、まるで時が止まっているような、そんな印象も受けました。観光国フランスの、別の一面を見ることができた運河クルーズは、一般的な観光地に飽きた旅行者には、もってこいのプログラムであることは間違いありません。機会を作って、また別の地域でも楽しんでみたいと思います。

(文/おかのゆうこ)